奥州仙碁萩　巻之六

へ13
4060
5

へ 13
40660
3

奥州伊達藩

巻之六

一 妓楼を禁じし事

附 松島遊覧し事

一 伊達家藩士刺客を出す事

一 謀叛を つゝ 一味し者し事

イ17.2575(5)

49-2699

へ 13
門 4060
號 5
巻

一 再毒害し謀をなす事

附 浅野長矩浪士論し事

一 明村隠岐守疾隙し事

附 荒木和助忠し事

早稲田大学図書

奥州仙台藩秘案之六

一 妖怪を現し事

附 松前退散し事

一 鹿熊より八濃屋松右衛門白魚を捕し事

一 若年の武士を切殺す事

一 義を立らびに人命を救ひし事

117 3575(5)

きこえ――のバ袖あゝみ枕を傷
こわれをみ物にわりきなる嵐あて
怨の代物枕えまんくあゆむ〻たち
より思れバ敵をいがはこと起あがりてく
敵義を志たゝかに打れれるといふく
通る我能かつゝ引橋くと訪処を
掘先こ保ゝ二つ三ツ切思れば知
死せり明相こやそれ捨んとする物を

と打捨ー〻人の家を頭
張て附かきこれをみだ菩提
小明りこれ家中にかくれ出のきを
のびて大名人なり瓦を踏のて打
さのれ死たり杉和泉を踏る井平
河伯せ物部白害あるべとわとひ
とを敵白そうよれ捨ける赤に知人
さらまはりまそれ家をうて用心

また又ある夜夢に老翁の仏像を持
厠にありしが我身の脇に来り給ひ
て我先に檜の板にて作りしみ
れし老翁の仏像を懐中より出し
その形を顕はし給ふを見れば仏者
眼一ッにして口になし色あをし
髪は中にて女の如きに背中に
老母の仏像を出し自ら名のり給ひて

我をもて絶しが仏者の姿を見し
光はありし迎へしが夜半なれど
庭にて梅の下に見えしなり
節なる者にこれを持ちて
いふには此の如き事を知らず
んう我か身の懸念たのし
迷ひも我身誰かはしらず
し波迄念仏ばかりし浅草に

むのおとしけるに、船頭、水夫、諸人、驚きて、
あれあるべしとて、船をはせけるに、
あらいかべいとて、漕ぎ出だしあれに去
たゞねるうちに、夢物語とりあつめ法
しうに物もとりもち、夢物語物がたり
りうにかけるハもとまさしく、聖
しに業平、ひとりの物ぬしにて、おのれ
大きなる山なるとて、漕ぎ出だし、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

事なり荒磯のかげとし安人がはら
ま怨りて癒し力を尽し霊験殊に
あらはれ卯の花を守護詞とかきて
て命や全く其餘りに仙の力をもちなき
代後を呪ひ超たてまつり必ず安人係
論するいのりをし其眼前をみんと祈念
祭前これを洗しぬかれば誓言
おそしわが説のまへにてきくべしと

いひてこれをよむ文に曰
伏而請安人抜精誠奉驚天神
地祇納言息子代今遮断以白川
之後納息令為家督卒天神
地祇乎早以代神立所可断息子
代令絶
奉寄者也百拝稽首謹願成
就儀白

寛文七丁未年六月　頑乏あん人

ゆくのみおほかりければ浅学のおそれは愚
なるみぢを流餘が新旧たるおほせを
歳々に金銀清がいかに金銀が子々ハかんじ
が子はまよじに大きのれバ沙ちらで下れ
とうせん孫を聞ずりと新旧たる役世いろ
ま金玉清がいつか御文孫ま出がたく江ちな
り一重光おのかのま勝るもとを見正記の偽書

されども天般をね世法の義たくがかんじ
さしあさうし陳典て伺ありつき筋
なるのし寄をかんてんりて金銀清納
人を駈いて世をつけるがね筋納筆
非文般ちてもんの金銀にもとしかし見もと鐘
後ち浅学の伎家にむのかさし新かく
備篇中に論で上座とる行事上陰けれ
今般地にかわし世説中をも記た筆

人なり一家一門をたれば儀
式衆にあらんずるなりとい
ふ事もなかりけるとぞ聲
をたつてはなく物もなげかず
を歎悲哀ふかりしるべしと
ぞ感涙をのごうべく
いかに歎えもとゝ
ゝ思せんとぞ思
ふ事をとゝのうべく
事思にてゝ
虚名ばかりもあるべし

宮ゐるを例あるべきことなり
ゆゑあるべくとぞ
あるべくとぞ
をぬれそと
人をを
おもひ
まゐ
あるべ
離

たまふ頭に戴る冠となされけるハ是ハ
正敷諸君達の宗教の上首としたくみハ
こそされあるべし幾度も自然ぎ経
うるべし其高弟に事をまく
安置が姫をなれバ御年ろまでもこ元
恐多の代々叔殺は衛聞其御ハ其
作とも見れ至の命べし我の帰依を
節依し自役を顔をとし　なりぬ

とくさる紫部をしるとひれぞかふ
よ分明なる数書これある上をなん
うさのらんぞといふ頭被る文りかる
悪事を祈りんへの数をよく学ざる経
まくも居ずまを書あるもの筆を
一ツかり又別書たまふが神社ま納置し
此中に堤も二ツかりもとくつてあん
比鮮けりかきし松わかきにを

うんどこうはのきしとさるとおぼめく時は
り他の事は能と沖がるくれたる人を
を一先の和歌をいかが後日は沙汰こそ
うるはしく他世界の歌書も考おたる事
流とやらん物のかたきに能事をこうるざは
こをしらん名世世界をとうる安家は
詮はあるべき事あらされとあれべく
と苦しく成とやさしれはれば異文おと

破きん事をさつしもしけるを
聞流るうあしく沙判清水殿ゝ海
ら名聞をうたがうもきいたれをうた
のうたのうたの賞
中御沙汰能の代後世歌をさはこと
小田原殿もの遠一遍沙汰ゝ名誉
主實人のをも乱さされはうんに沙汰
屋さい後を船事八隠居後仕遍

諸侯の家臣の中にて抜きんでられたる人の例べ
とかくよしなき筆の弟子なれども大くさアア
そのうつくしき事限りなさられず後の助
たる我が家雪の撫でて合せて大切にも
雪の殿宮様の御や[illegible]の事[illegible]
[illegible]忠義をたしむべきこころに係人の珠
[illegible]かるる虎命をかかんもの
[illegible]遠うだい初君の上に

紀伊殿[illegible]たる人の抜きん遠られた
りし五郎を[illegible]せばあるべうもなしと
[illegible]をかくいめ[illegible]人[illegible]
代後家[illegible]
[illegible]
極[illegible]
[illegible]
をかしけり

伊達安藝殺害せらるゝ事

田村隠岐守右京の裁許によつて両人の訴わけ
分別なくして事済しうちに江戸八皆
あづまりぬ志の所に仙台屋敷の城
まして八月十五夜の事なれど名月も中々
都鄙ともに殊もて憐みしが安藝が
家族共此外あまり酒宴もとゞめて

あつらへし八を中の間に並べ庭の植込
繁みに隠れ動振子に見えけるが一座
皆々沈酔して是を見咎る者なく
しく夜も更ければおのおの退散したり
安藝は己が寝所に入れまで家僕を
皆々昼の草臥に前後もしらず
臥て家内ひつそと志づまりぬ
其時かねて植込に忍居たるその賊

中ごろく引かがりたるぶきんへとなる者
あるいりたを付記をしるして掃部の上蔭
ゑのとあゆんこせしぶ修者修せるを
もたりはん蔭子より鳴きたる安義を
目をこえ一枝をあげて水はきだ
陰ものを入る入部の蔭ゑ小修しゑた
安義を鳴るとあるひしぶ
思案より迎ゑ初をとる退参

1とし人はほたる蔭ゑ掃部蔭ゑ
身をこそめ枝ゑ付けるゑ修者
見をたび蔭ゑも押明
鳴入ゑ夜貫をは武刀実たり
しを安義をゑ蔭の蔭ゑ鳴
ゑ修由者をゑ押えたる者
ぶゑ盃紙のおとそを枝ぎ休け
由者かゑをあはゑ比較

たり今さいはをうかゝ出たゝ全我が
逆流あゝ行中十市がら軍兵
軍を指といふ人の義隆父祭
家臣を何れに為も合かゝ
のごとくなる所へ大内とて彼方とて
武家衆を志きりに責て曲者ゆゑ
今但馬しも枝廣る道にあり白人
拙者を相ゆゝとしかゝ敵方に小

十市ゑのうくしまゞとりゝ伊達富慶
と知を合戦事に中分あるに刈刈せても
志のうにて此辺是ゝ泊ゝ果あゝ
まゝ全為へ朝あゝ者を
志ぬらる是ゝ是人家雪駄
志ゝ志べらく田家せゝず刈らく
と笑ゝ知の者と見ゝ逆伯あ
び十市ケ家家ゝ賀

中市ゲ家来ハ格別なるべきも
[illegible]ようなる中市ゲ家人中
[illegible]寶にあらざれば見こまれ[illegible]と[illegible]
月用をへぐうるの[illegible]
[illegible]ハ家を雲せんとの功なり
[illegible]これをなすべきものなり[illegible]人
をいやしくとい[illegible]者[illegible]家中
市ゲ[illegible]

[illegible]家人[illegible]
[illegible]者[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

諫語七の一味の者の事

[illegible]

たる藤代し数あり三石石を[illegible]
江戸の[illegible]仙者にて[illegible]寛文八戊申
年二月廿七日へ[illegible]百姓[illegible]
[illegible]そなえおさよ通中のうし横山
[illegible]横山[illegible]西村[illegible]
[illegible]あり[illegible]
横山[illegible]
[illegible]

乳母の[illegible]
とみえたり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

てきてむ其上にて浅香見えて幽霊あるか
代々名あげる事ありし其の浅香
その身自にかぎりし其後善悪しとがめて
毒ある事をもありたるも病人ならば
そのれ其罪をしんじべくして因果もこれもて
並鬼ともせしといひ丹三郎兄も皆へ
旅の年暦食せしてしかとへ毒とらは
了死此是正数配膳の如中りて膳乃

色あしきかほばせを咎たる故浅香見えぬくもの
れがも色めたる程にをとしけれ小袖を
伏へ恩譲たるならば殊に其殿の
時日ならを以て善の間違とは身して遣
そきたらびに事其身しきたれり其
身なとだに浅香魂が血の其しを吹色とず
事あらされ松葉の倒止給ま
紛なし忍人刑まかしさき屈し

陸奥なるかくしこれを制し穏かに扱ひて
政岡はこえねでに乳母役を勤め奉り
退役を仰付られたる所の事に染ぬ
一立の中にも若殿の其外のみなあしきをふくむ
といへども力およばずこれをのりしる浅
岡は悪臣を横領の代に諸士を悪
ひとしく己に偏り者をば恵の代に
逆意に入たる速時に讒者にし己が

心よからざることのもとにして讒して追
遠ざけられしとも恵の代の政岡乳母といふ家
臣が諫めれども乳母としてもこれ我
のことともあらねばこれをとめば我
うつたへし旅別遠ざけられぬりとふ
剣を合せ丹をかんず意こそれまつたく
浅岡も人が企てのみにて阿諛に家
臣として心を合せし細く浅岡もとこそ

乳母として事をも沙汰したりしこみゑたり
色小をとして是をおろかせ給ひてし
いかゞし御野心をたくみつゝとともなる宮郷の御なり
日夜殿とも様をもたんび文の御二月上旬
まいたりし志賀左衛門殿つゝ賢者が宮郷に来
賢者の大事にし御遁所上よりも御
おとゞとのをも隠密してやうぐし退きて御
遁し君明夜して御をも隠密されば

きゝ伝ともに気色としつけらるべき事
旨隠密にしておせ渡されたりとぞ
新五左衛門つ大の眼を見るか御かし君のため
小忠をはくしそれなんぞ隠密なる後の御
せんやあれば持仏堂つをおとしこ
りて御よ志賀左衛門つ小袖になりてかけ
るもの是に隠密にして後の仕形一てその
いゑ仏志すれ一やむ事しを忘れ殊使

にきたれり全く[illegible]の[illegible]あり[illegible]
[illegible]人[illegible]ちうりにだすのおくのだ
ぜうと[illegible]ものとなる[illegible]きうとうけ[illegible]と
り新[illegible]つがりの[illegible]の[illegible]の[illegible]一家
[illegible]とそれとの[illegible]の[illegible]
[illegible]に[illegible]の懐中[illegible]の[illegible]一対[illegible]書を
[illegible]ハ[illegible]のちちと
[illegible]の[illegible]心[illegible]たり

志の[illegible]うえた[illegible]国[illegible]に志といた
[illegible]の一[illegible]の四[illegible]をたまひ連[illegible]
[illegible]とりえ[illegible]かまて[illegible]とれをもらき
みまて

国村[illegible]乳母[illegible]松[illegible]
[illegible]人心[illegible]乳[illegible]
[illegible]安[illegible]一類[illegible]家[illegible]乳母
[illegible]志[illegible]一列[illegible]可[illegible]

家にし飯炊ぎ四百伊達筋
少輔右兵衛尉平朝臣[illegible]

寛文八戊申年[illegible]

伊達筋少輔
兵衛尉平[illegible]
福田[illegible]
同村[illegible]助
吉田[illegible]
大[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
一味[illegible]

再毒害[illegible]
附[illegible]

[illegible]

亀の代の殿をまもりあまの川その
きしろ新郎たちをゑんまことあさまし
志の前よ小姓ども金銀をひかひあるまじき
手をつくしぬる菓子一器梅干
代殿御なぐさみとてさしいふひと
寄見よそめづらしき菓子どもな
まだし梅の代殿にくれをとらせし
んとてなりたまへとも浅ましき哉

せめてそ不便味きしうゑんなめ手さし
あげらぬ事なれども客役の
人ちころみれども老しうゑまで手を
めしあがらぬ御盛しりでしまて
まそめあそれしそう金子へ皆みて浅
鬼殿ごぜんこそしても不思ろ鬼
役しそのまだしをなしそれがし
ごぜんに入てしろみをもたべしと

こゝゑとつぞいらだうしゝまうさ
けばゝあぶなすしゝろうろうたび
たてまつらんとて清水観音をあき
るゝまつたくゝ金剛法さしあげ
られたるあらうしぬるハあらはぬ
加護はは法ぜんと観音菩薩へまそ
ころみをしうとことたりとにぶ
れるあらうりはまんとうかれば

たとえ出一度のりはあるりあるの
りとい名ごとこんぺいあるちみにあ
らむぞんさしあげうしあげ
いり金剛法かきにいのりあるも
如法愚痴なれどとうとう金剛
まうゝとれらはうたのゆゝく
たれをこの時ゝたまうあるり
にくちかいぶんはりゆゝく

彼蓮をひらんとて清泉なのをえた
なのさんばなりとおんこうしたりろうの花
蓮人あるうみにてはかもむべうう
ぶしと引ひらんと引合しまて彼ひ
をおとうばとおしに引潜ぬきバ蓮の八
めとらばれ掛蓮けるに合三指いあく
いうりてうれうに蓮はたくしあた
蓮をうちもうたうとこそむ

ぬんなれなんじ如まあうざれうば
仕るうとあれども如りれバむぬを
なのでうあらのゆるなりとあうり
を蓮をうたちいうるかのうち数
たる蓮をを小布乙知にあうえは
るうう朝乙知ひもお死せり渋
器かの安にかどうきかさぬてうり
蓮人のうをめ拾ううとかたく

やーあげ屋うじげとかーえさと
けば金子ばこと[illegible]かりてさだめた
みくーきみあしきやありけん
病気とがとかーおけせざりけま

田村隈麿の疫隈の事

附荒木和助悪事事

田村隈麿ばくーおそれけるハ

[illegible]と国[illegible]代[illegible]しろみ
たりやくーじもあれさかしく[illegible]さ
らにあらるるよびさいうれども仮又
といとてせるあとせるれぞ
あらまあうせばあまつちえされ
をちんぜばーー早速ちゃうがん
かるーじくぞあとどもかり
御[illegible]をのれてーことをとうがふ

ふぞ太うじとこれのり御紀ゆく
せやしうおのれが愛にしたがき
ことしり家ぬ家ぬとうめびと
らきけり海原廣もとこれもとたてき
あなきてよろこびさんを事をたの
らんと記そうに菊中秋助をすま
ぬきたかりことなさてのきはれ
た秋助をすきうをおさりを

ときりをとこころをを鷹文十庚戌年
七月廿日後鳥羽院の代後花園天
皇のびいるこのあり松前藩の助ま
年月をとくるをみあちとろ
あしまいこをとを生代世高
せしまかのを志の代使うの藩
天をあいるとこをを藩の助へた
りやあをとむきくんだりかのこの

[illegible]れとのたまひてたゞ引きのゝしり
[illegible]
いたりこのとき[illegible]あとをきぬ浅
[illegible]
おこし[illegible]をあげさせ火を點ん
[illegible]
けるんしたちまちこゝろ[illegible]
[illegible]

[illegible]秋助やすりあつめわゆく後
[illegible]助がうち[illegible]
きく人かんじあえりをもはたち私
助をばあざむ[illegible]
せがれとんおのぶ[illegible]
ゐきりこゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

はうさしきしあさまるに紙屋
いしどちかどろうまあぐーとれらかいま
ありしーぐえ来もどーこのうーの
らざしあとの庵紙戸は金張をぬ
きみとりかけをちせーゆくはくら
をしーたづぬるにみえざりしが
いぜん偏奈とうねーく懸角商
らあんすねきーくまるゆくまの

ぎうぬきみすいりつらんすくぎ
くみとのたりゆ迷沢を廣英
しえ嶽なぞきーつみおこれまよ
つー鈴沢しをすーゆ遍人す
なりーきみすぬ

奥州征夷物語巻之六畢

樂天堂佐藤了菊

蔵書